
甘党妖精は時に襲い掛かる。

moro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘党妖精は時に襲い掛かる。

【コード】

N9201D

【作者名】

mororo

【あらすじ】

なあ聞きたいんだけどさ、妖精って知ってるよな、妖精。……そうそう、そのピーターパンの周りをうるちよろしてた奴みたいな妖精。アレってさ、どう考えても幻想の産物だよな？いやさ、なんかさっきから、俺の横にいるガキ女が自分は妖精だとかほざいてるんだよ。おまけに俺を助けに来たとか何とか。だろー？有り得ないだろ？よしわかった。とりあえず、勝手に部屋に上がっているこのガキを警察に通報しておくよ。全五話の短編です。コミカルに仕上げているので、するするゆるーと気軽にお読みください。

第一話 寝ぼけた男は時に幻を見る。(前書き)

評価感想、お待ちしております。

第一話 寝ぼけた男は時に幻を見る。

幻想という言葉は「幻」を「想」と書いて成り立つのであって、現実には有り得ないことをあるように抱く行為を言うのである。言うまでもなく、それは古今東西語り継がれてきただけの取り留めない想像であり、実際に見たという人は稀であるだろうし、人々はそれを信じないというのが常だ。

この世に生を受けて十九年。俺は日本人男性の大半は経験するであろう極々平凡な日常を送ってきた。

小学校では好きな女子をからかい、中学校では友人とエロ話に花を咲かせ、高校ではそれなりに恋愛もした。

そんな普通の人生の中で、絵本の中で語られるような幻想などは見られるわけもなく、差し障りのない生活を過ごした。

そう。差し障りのない生活を送ってきたはずである。

なのに何故、俺は今、見ず知らずの女の子の隣に寝ているのだろうか。

甘党妖精は時に襲い掛かる。

「あ、やーっと起きた」

覚醒しきっていない脳に女性の声が響く。幼さの残った声は起き

ぬけの頭には刺激的すぎたが、俺の意識を定まらせるにはまだ少し足りない。濁り切った頭の中でそう判断する。

狭い視界に飛び込んできたのは、女の子らしい細い指。存在を確認するようにゆらゆら振れている。

「おおーい、起きてますかあ？」

「……ああ……起きた、ぞ……」

混沌とする意識の中で何とかそれに応じる。自分の声が別人のよう聞こえる。

「もう、早く起きてよね。早く説明して早く終わらせて早く帰りたいんだからっ」

おもむろに目を開けると、早く早くとやたらと連発する女を視界に捕らえた。

齢十五ほどに見える少女が、腰に手を当ててこちらを見ていた。

二つに束ねた柔らかそうな髪の毛がその腰辺りまで伸びている。

「せ、つめい……？」

だんだんと今の自分の状況を飲み込み始めるも、少女の言うことは理解不能であった。

俺はその「説明」という言葉の意味の説明を求めるといって高度な疑問を突きつけるが、少女は俺の疑問など塵ほども意に介さないように、

「私は妖精！ あなたを助けるためにやってきましたっ！」

などと言いつつ放った。

（ああそうか……。そういうことね）

目の前に美少女。私は妖精。あなたを助けに来ましたよ。

これらがたたき出す結論。

「ああ……俺は何て夢を見てるんだ……」

夢とは自分の脳が見せる無意識な願望、とは誰が発見したんだっ
たか。

自分の想像力のなさ、無自覚にも女に飢えていることについて
激しく自己嫌悪しながら俺は再び毛布を被る。

「ちよ、ちよっと待ってよ！ 夢じゃないって！」

夢の住人が俺をベッドから引きずり出そうとする。

夢じゃないなんて、そんなわけないだろう。俺が女を家に連れ込む？ それもこんな年端も行かない少女を？ ありえない。俺の紳士道に誓って有り得ないね。

だからこれは夢だ。ルシッドドリームと言うやつだよ。

「じゃあな、夢の住人」

「だから夢じゃないって言ってるでしょ！？ ほら、この通りいい

……！！」

「いだだだだっ！ ほ、ほっぺを引つ張るなっ！」

少女が細い指をめいっばい駆使して俺の頬をつねる。

(あ、あれ？ なんで痛いんだ？)

夢なら痛覚などあるはずがない。

夢か現か確認するまでもないと思っていたが、これはどうやら明晰夢ではないらしい。

「ほら、ちゃんと目覚めた？」

そう言っつて少女は俺の顔を覗き込む。思わぬ接近にたじろいだのは男の哀しい性である。

頬の痛みで完全に目覚めた頭は、声の主がわりと美しいことに気付いた。頭の横で束ねている二つの髪の毛は、光を放っているかのように輝かしい金色で、否応なしに見るものを惹きつける。筋が通った鼻や、ぷっくり膨らんだ頬。淡いセルリアンブルーに輝く瞳までもが、自分を吸い込もうとしているようだ。

服は真っ白なワンピースで、胸の部分に緑色の一花が添えてある。髪は金と服の白とで若干まぶしくなる。

(外人サンか……？)

流暢な日本語を使っているが、見た目はどう考えてもこの国の者ではない。

なぜこんな美少女が俺の部屋に？

夢ではない。昨夜、ナニするために連れ込んだわけでもないと思う。

ではなぜ？

.....

.....

「あのお.....もしもし.....」

客観的に、冷静になって考えてみよう。これは夢ではないしアレな感じでもない。というか、別に昨日の夜の記憶がないというわけでもないのだ。昨晚は別段変わったこともなく床に付いたはずである。いや、ついた。断言できる。となると、客観的に考えて。この状況は

「ええと、混乱するのは当たり前なんで、もっと気軽にしてっ

て、どうしたの？ 携帯なんか手にして」

ピ、ポ、パ。

トウルルルルルル、ガチャ。

「あ、もしもし警察ですか？ 空き巣狙いを見つけた」

「うをおおおおおおい！！ ちょっと待てやーっ！！」

ばーんと少女が目にも止まらぬ速さで俺の手から携帯を盗み取る。

「何すんだ空き巣」

「何すんだじゃないでしょ！！ なんでこの私が泥棒と間違えられなきゃいけないの!？」

「ここには金目のものなんか一つもないぞ？」

「だから違うっつーに!!! とうかさそもそもあなたが居るんだから空き巣じゃないでしょう!」

「まあでも、俺の心なら盗んでいってもいいけど」

「そんなもんいらんわ!!! っていうか人の話を聞け!!!」

さりげない俺のくさいセリフにもきちんとツッコミを入れる空き巣狙い。せいぜい言いながら必至に言い訳をしようとしている。

「ふん。話を聞けだど？ あいにく、泥棒に傾ける耳など持ち合わせでねえんだ」

「だからなんでそう決め付けてるの！ 私は妖精だって言ってるじゃない！！」

この期に及んでまだそんなひよつたことを。とんだ妄想女だ。

「残念ながら俺の想像する妖精と、お前の信じている妖精は姿かたちが全く違うようだな。色々言いたい事はあるがとりあえず、ティンカーベルがそんな一分の一スケールの大きさだったらピーターパンも大爆笑だ」

「今はただ人間の大きさに合わせているだけ。せつかく驚かせないようにこの姿になったのに、逆効果だったよ……」

なにやら意味深な発言をして軽く落ち込む妖精（自称）。

「ほうほう、そういう設定なのか。お前の中では」

「設定とか言うな！ ホントなの！」

少しむきになりかけている妖精（笑）。黄色の長髪を振り乱しながら必至に訴えかけている様はなかなかキュートで、どこかそそられる。

「ホントなの……ホントなんだってばあ……何で信じてくれないのよう……」

大声で叫んでいた少女がだんだんと語尾を小さくしていき、仕舞いには泣き出してしまいそうな雰囲気を作っていた。

（や、やべ……）

相手が男だろうと女だろうと容赦なく警察に突き出そうとした俺だが、女性を泣かしたとなっっちゃあ話は別である。動揺し、この場を取り繕う言葉を考える。

「……わ、わかったわかった。話だけなら聞いてやる」

「ホント！？ よかったー、やっと説明ができ」

「ただし」

ぱあつと安堵の表情を浮かべた瞬間、右手を前に出して少女の言葉を遮る。不安そうな表情がよぎった。

「お前の今の姿が仮のものだというなら、本来の姿を見せてもらおうか。話はそれからだ」

俺の真面目そうな顔に少女はきよとんとした面持ちを見せる。

どうだ、これで言い逃れは出来ないだろう。さっさと諦めて出頭してもらいたいものだね。いやまてよ。やっぱり、何も盗られてなかったら警察に突き出すのはやめといてやろうか。何かのつぴきならない事情があったかもしれないしな。この子可愛いし。

「あ、そーか！ 早く姿見せればいいんだった！」

何やってんだろ私うつかりさん、と少女。そのたった今思い出したような発言は妙に現実味があり、思わず信じてしまいそうになる。「あ、変身している間は見ちゃダメだからね？ 後ろ向いててくれる……？」

頬を薄く赤らめ、ぼそぼそと呟く。その女の子らしい態度に不覚にも艶を感じ、慌てて後ろを向く。

(つーか、何やってんだ俺は……)

電波女の言うとおりに後ろを向き、泥棒女に隙を見せている。これが本物の泥棒だったら、隙を見せた瞬間にがーんと後頭部をやってまんまと逃げられてしまうだろう。

そんな危険な行為を、まあいいかと思わせてしまうのも、美しい女性のみがなせる技か。げに恐ろしきは峰不二子。

何言ってるんだ俺。

「いいよー」

先程と全く変わっていない声色の少女が呼んだ。

殴られなかったことに安堵して振り向くと、

妖精がいた。

先程の少女の全体縮図みたいなた体に羽がついている。全部で四枚の羽は、一枚一枚が限りなく透明に近い。体長は二十センチほどで、ツインテールの金髪は今だ健在である。

(……あ?)

比喻でも何もなく、開いた口がふさがらない。

馬鹿みたいに口を開けて放心している。

「へへー、驚いたでしょ？　これが私の本当の姿だよっ」

どう、なんて誇らしげに胸を張り、最小化した体で浮遊する。

呆気に取られている俺などお構いなしに、ぶーんと体の回りを二、三周する。

少女の急激な変化に俺は、

「ふい、ファイギュアが空を舞っているううう！？」

「結論おかしくない！？　もっと別のところに驚いてよ！！」

ちよつと待てちよつと待てちよつと待て。なんだこれはどうしたんだ俺何幻覚見てんだ！？　だめだよだめだよ幻覚はいかんよ、麻薬は日本をダメにしていくよ！　ドラッグ、ダメ、ゼツタイ！！　そうだそうだ。そうと決まったら早く行かないと。電話しないと。ピ、ポ、パ。

トウルルルルルル、ガチャ。

「あ、もしもし病院ですか？　救急車一台よろしくおねが」

「だから待てえええええ！！　どこに電話してんのよーっ！！」

さつきと同じように俺の携帯電話を掠め取る空飛ぶファイギュア。

先程と少し違うのは、それを体全体で支えていることだろうか。必至になって携帯電話にしがみついている。

「落ち着いてっば！　これは幻覚じゃないから！　現実だよ！

紛れもない現実だよ！！」

少女の金切り声のおかげか、そこではつと我に返る。頭に上っていた血が少しずつ引いていくのが分かった。

「落ち着いた？」

「え……あ、ああ」

「もう……思った以上に物分りが悪いんだねえ。調べたときはもの凄く知的に見えたんだけど」

(いやいやこれは物分り云々の次元じゃないだろ……って、調べ

た?)

妖精の言葉に少し引っかかりを覚える。

「調べたってなんだ？ 俺のことをか？」

「あ、正気に戻ってきたね。何のことか気になる？」

「どうなのかな、ん？ と俺の顔の周りをぶんぶん飛び回りながら得意げに訊く。

う、うぜえ。」

「それはねえ、話すとき長くなるんだけど」

「ぴたつと目の前で止まる。腕を伸ばしたら簡単に掴めてしまいそうな距離で、妖精は真剣な顔になった。

「私はあなたを助けに来たの」

「そういえば、何かそんなことを初めに言っていたような……？」

「数分前ならばはつと鼻で笑って蹴り飛ばすところだが、コイツは今となつては空き巣でもなく家出少女でもなく、真正銘の妖精とわかってしまった。信じないわけには

「正確には、あなたを守るため、って感じ。これから起こるだろうと予測される出来事からあなたを守るため。そのために、少しでも貴方のことを調べる必要があったのね。いい？ あなたは私に守られるんだよ？ だから言うこと聞かなくちゃダメだよ？ あと、命を助けてもらうんだから、うーんと私に感謝すること！ 終わったらちゃんと『おお、ありがとうございませう妖精様。お礼にこの最高級のお菓子を差し上げます』とかなんとか涙を流しながら言うんだよ！ わかった？」

「信じないわけには、いかない、か？」

「シュークリームでお願いねなどと付け加え、ぱちんとウィンクする姿を見ると、胡散臭さが五割増しになった。

「まあそれは、その出来事とやらが本当に起こり、俺が命の危険にさらされ、なおかつお前に命を助けられてから考えるとしよう」

「……………えー」

「なんだ、何か不満か、妖精様？」

「だってえ、あなたが危険にさらされないようにするために私が抑制するんだからー、そんな状況にはならないよう」

「ぶーぶーと口を尖らせ、不満を露にする。」

「は？ 抑制？」

「そ。私が魔法でちやちやーつとね、力を封印するの」

「……頭が痛くなってきた。魔法？ 力？ 封印？ なんのこともやらさっぱりだ。俺の理解力が足りないというより、コイツの話が要領を得ていない。」

「……そろそろ説明してくれないか？ お前は何の話をしている？ その出来事とは何だ？ 妖精とかいるんだし、魔法とかもあるのか？ 力って何だ？ というか、そもそもお前は何者なんだ？」

「今までの会話に出てきた疑問を一度に羅列する。これ以外にも聞きたいことは山ほどあるが。」

「……ふんだ。私にシュークリームあげるって言わないと教ええない」

「フーン、とそっぱを向いてしまう。」

「コイツ、何ですかねているんだ。最近の妖精はお菓子を謙譲しないと働いてくれないのでも言うのか。世も末だな。」

「あつそ。そういう態度。そうかそうかそういう態度。俺がこんなに頼み込んでいるというのに、その態度」

「な、なによ。別にあなたへの態度なんてどうだって　むぐつ！　？」

「妖精が抗議の声を上げようとしたところですよと右手を伸ばし、指先で小さな口を塞ぐ。見た目は人形の他何者でもないように見えるが、実際はしっかりと体温があり暖かった。」

「お前はすっかり忘れていているようだ　　もっと警戒心というものを持つたほうがいい」

「左手で妖精の小さな足をつまみ、右の親指と人差し指で頭を持つ。するとどうでしょう。あつという間に拷問準備ができちゃった　　「んんんんんんんんんんんんんんんん！！」」

身体の上下を固定されてジタバタともがく姿はなかなか滑稽だ。その道の人が見たら生つば物だろう。……俺はそんな趣味ないけどね、もちろん。

「んんんー！ んんんんー！」

『離せー！』か？ 後半は分からないが、俺に対する侮辱の言葉だということくらいはわかる。ふはは、もつともがくがいい。もがき苦しめー！……と、冗談はこのくらいにして。

「おい、話す気になったか？」

「んんんー！」

『ヤダねー！』か？ その証拠に、動いてはいないが、顔が横方向に動こうとしているのを感じる。なかなか往生際の悪いやつだ。

「あくまでも、ただで話す気はないと？」

「んー！」

……ふ、そうか。それならば最後の手段だ。

「あー、妖精？」

「ん？」

「俺さあ、最近指先のコントロールが効かないんだよねー」

びたり、と妖精の動きが止まる。終始ジタバタと暴れていたのが嘘のように静かになった。

「最近つて言ってもたまになんだが。豆腐を取るときとか、ペンを握るときとか、力の加減を間違っちゃうんだよ。豆腐が崩れるということまでは普通なんだが ペンまで折っちゃうことがあるんだ」
静かになった妖精から、わずかに震えが伝わってくる。だったらと冷や汗を流し、今はまったく抵抗していない。

「こつ……バキッ！ っとな。思わず力を入れすぎてしまう」

バキッと俺が言った瞬間、ビクッと跳ねる妖精。おもしろい。

「話して、くれるよね？」

有無を言わさない声で問うと、

「……………ん」

蚊のように小さな声が降伏を示してくれました。

第一話 寝ぼけた男は時に幻を見る。(後書き)

やっとここを復活しました。

これからどうぞよろしくお願いします。

第二話 空飛ぶ妖精は時に饒舌になる。(前書き)

評価感想、お待ちしております。

第二話 空飛ぶ妖精は時に饒舌になる。

「で、ちゃんと話すんだよな？」

「はい、すべて白状します……」

拘束から開放した後、即座に妖精を俺のベッドに座らせて、刑事ドラマに引けを取らない事情調査で情報を聞き出すことにした。カツ井の代わりにも思ってプリン（賞味期限切れ）を出すと、ものすごい勢いで喜ばれた。どこからか取り出したミニチュアスプーンですぐ取り、もきゅもきゅ食べる姿に少し癒されたのは内緒だ。

「ほら、食いながらでいいから話せ」

「むぐ、あのね……んく。簡単に言つと、力つていうのはそのままの意味で、人間がもとももっている能力のこと。抑制つていうのはその暴走を防ぐこと。まほーはそのために使うんだよ」

「ちよつと待つてくれ」

そんなファンタジックなことをたった七十字程度で表さないでほしい。漫画のあらずじでもそんな簡潔なのは見たことがない。

「もつと詳しく教える」

食べ物を与えたら少しは満足してくれたのか、先程の不満そうな表情は見られず、むしろ生き生きとした表情で話を進めていく。

「えつとね、人間にはもともと自己防衛のための力が備わっているの。隠された力みたいな。火事場の馬鹿力とか、死に際の走馬灯とかがそれに近い感じ。根本を突き詰めれば力とはそのことだよ」

「自己防衛の力ねえ……」

「そ。火事場の馬鹿力は言わずもなだけど、走馬灯もその一種ね。死の危険が差し迫つた際に過去の情報の内から、力を使った最高速度で、現状回避のための手段を探し出しているんじゃないかな。」

「なんだか良く分からないが、どちらも名前だけは知っている。とは言つものの、言葉として知っただけで実際に体験などしたこ

とはないんだが。

「暴走を防ぐとか言っているが、その力が暴走しちまったら俺はどうなるんだ？ まさかとは思うが、死んじまったりはしないよな……？」

当たり前前の疑問を、恐る恐る訊いてみる。

「あ、あはは、ままままさかあ」

「俺の目を見て言え」

そんなわけないって、などと言う妖精の目はとんでもない速さで泳いでおり、俺の予想を裏付けた。

（まさか死ぬとは思わなんだ）

力の暴走とかいうから、もしかして俺魔法使いとかになれるんじゃない？ とか漫画みたいな展開を思っていた俺が馬鹿だった。流石に死ぬのは困る。やり残したことが山のようにあるからな。

「い、いやー……ホントに違うんだよ」

「だから俺の目を見る」

「あなたの目を見れないのは、いやー……その、あの、もっと別の理由があつて……」

「なんだ、はつきり言ってくれ」

もはや嘘というのは明確なのに、あいまいな言い方を続ける妖精。死という言葉を直接的に感じさせないようにするため、コイツなりに気遣ってくれているのだろうか。……だとしたら、いい奴じゃないか。

「あ、うん、それじゃあはつきり言うけど　ぶっちゃけ、暴走しちゃったら死ぬより酷いです」

「……………は？」

「というより死にたくなる、みたいな？ オブラートに包んだ言い方をすれば、日常生活が困難になる程度なんだけど」

あ、なんだそんなこと。と安堵したのもつかの間。

「力が覚醒したら、歩くたびに地面が陥没して、少しジャンプするだけで東京タワーの頂上へまっしぐら。皮膚はダイヤ以上の強度を

持ち、コップは掴んだ瞬間に粉碎するし、ため息吐けば建物が吹き飛んじやう」

「うそおおおおお!?」

「いやいや、これが本当なんだよ。悲しいことに……。あ、ちなみに外見は不細工ゴリラです」

「ぎゃあああああああ!」

嫌ってレベルじゃねーぞ! キングコングも倒せそうじゃないか!

「まあまあ落ち着いて。そうさせないためにも私が来たんだから」

「落ち着けるかつ! 余計心配だったの!」

「ひどい!? もうちよつと感謝されるかと思っただのに!」

うな垂れる妖精は置いといて。

こいつの話を信じると、事はなかなか深刻そうである。話を要約すると、放っておくと俺の身体には死よりひどい仕打ちが待ち受けていて、それを防げるのはこの甘党妖精しかないという感じ。

なにこの理不尽話。俺が何かしたとでも言うのか。

「まあ、悩んだって仕方ないよ。人生に一回はやることなんだし、それがちよつと早まったんだって思えばいいじゃない」

「あ? 人生に一回って、その言い方からすると、俺以外の人間にもこんな経験をした奴が居るってことになるんだが」

「もちろん」

なかなか衝撃発言だと思っただがどうだろう。

「大体、自己防衛の力なんて予備でしかないんだから、一生に一度くらい不備を起こしても仕方ないんじゃない?」

人間すべてが不良製品みたいな言い方はやめてほしいところである。

「んなこと言っても、いままで妖精を見たなんて痛々しい人、見たことも聞いたことないんだが?」

「あつたりまえだよ。私たちが仕事をした後はちゃんと記憶を消しているもの。そこら辺は下手しないから安心して」

「ああ、どつりで聞いたことないはずだ っつて、俺の記憶も消す

のか!？」

「そりやそうだよ。もし一人でもそれを怠って、世界が混乱しちゃったら色々面倒だしね。それに記憶の消去なんて簡単だよ。時間が立てばたつほど消去は難しくなるけど、力の暴走の抑制なんか十分もあれば済んじゃうし、その間くらいちゃっちゃと消してさつさと帰るの。そうやって時間を短縮しないと、地球の人すべてを網羅するなんて出来やしないよ」

「なんだか妖精の世界も大変そうである。子供の頃に聞いた楽園みたいなのは、やっぱり幻想でしかないのだろうか。」

「だいたい妖精の仕事はこれだけじゃないんだよ。世界の均衡も保たなくちゃいけないし、時間の管理もしくちゃいけない。あ、そういうえばあの仕事の締め切り明日だった。この忙しいときに……。つたく、あのアホ上司のせいで……。こんなに切羽詰っちゃったのは誰のせいだと！ 私のせいじゃないって言ってるのに！ だいたい部下のあの子がつっかりしていればねえ」

「あれ？力の説明を聞いていたと思ったら、いつの間にやら二十代後半女性のOLさんの愚痴みたいになつたよ？」

「とりあえずこれ以上は聞くだけ無駄なので、音声をシャットアウト。思考に集中することにする。」

（力の暴走ねえ……。なんだか世界の秘密を垣間見た気がするぜ。）
「最近力加減を誤ることがあるのはこういうことだったのかね。鍋の豆腐がつかめなくなつたのはまあいいとして、ペンをへし折るのは何かおかしいと思っていたけど。割り箸を折るのにも一苦労だった貧弱な俺にとって、普段以上の力が意図せず出るとするのは不気味という他ない。」

「しかし力の抑制とやらが終わつたら、今の記憶がなくなつちまうのか……。ほんの数分間とはいえ、せつかくこれだけ濃い経験をしたと言うのに、なんだか勿体無い気がする。目の前でまだ延々と愚痴を垂れ流している妖精のことを忘れてしまうのも、なんだか面白

くないし、それに　この妖精に記憶を消されるのは、なんか、嫌だ。

「　でさあ、家に帰り着くのなんか十一時だよ!?　じゅういちじ!　私はサービス残業に悩まされる三十代のパパかっての!　!　ちよつとは下で働く者の身にも　」

それにしても止まらないなあ、この口は。どうすればそんなにスラスラと言葉が出てくるのだろう。話すのが得意でない俺としては是非ともその技術を身に付けたいものである。

(よつほど、鬱憤が、溜まってんの、かねえ……)

仕事にまつわることでは、話を聞く限り　ほとんど聞き流したが　どこの世界も同じのようだ。

(俺は、そんな、疲れそうな、ところには、就職したく、ない、なあ……)

「ていうか給料上げろってんだ　って、ちよつと聞いている!?!」

噛み付きそうな勢いで食って掛かる妖精。顔がちよつと怖い。

「ん……ちゃんと、聞いているぞ……。えっと、自分の性癖の、話だっけ……?」

「まったくもって違うよ!?　もう!　真面目に　ってあれ?　どうしたの?」

「……ん?　何が、どうした、って……?」

「え、いや、何かフラフラしてるし、それに顔色も悪……っ!!　あなたまさか!」

自分の話を中断して、顔の近くに寄ってくる。

(おいおい、そんなに、ブンブン飛んでたら、虫と間違えて、叩き落とすちまうぜ……)

妖精をからかおうと思った言葉が、口から出ない。

あれ、なんでだ。

というか、なんか。

眠くなって、きた。

「嘘でしょう!?!　こんなはずは……こんなに早いわけが……!!」

うるさい妖精だなあ……。コイツは、あっちの世界からわざわざ、俺の睡眠を、邪魔しに来たの、だろうか。

「またあのバカ上司……。！！ 予定より何百時間も早いじゃない！
！ ねえあなた！ 絶対寝たらダメだからね！ 今すぐ結界の準備を」

おまえなあ、それは、無理な話だぜ。

だってもう、これは、抵抗できない。

「……じゃあ……おやすみ」

「あ、こら！！ ダメだって言って」

本気で焦ったような妖精の表情を最後に、俺は目を閉じた。

第二話 空飛ぶ妖精は時に饒舌になる。(後書き)

サイトのほうも寄って行ったださいなーっ！
何か一言くれると作者は狂喜乱舞します。

第三話 眠った男は時に女神の声を聞く。(前書き)

評価感想くださいな！。

第三話 眠った男は時に女神の声を聞く。

「ねえ、聞こえる!? ねえってば!! 起きてよう!!」

……あ、れ? 俺、さつき眠らなかつたか? 気絶に近い感じで意識を失ったはずなのに、何故妖精の音がこうもはっきりと聞こえているのだろう。

というか、ここどこだ?

気付いたら、黒の絵の具から搾り取ったような暗闇の上に俺は立っていた。一寸先も見えないはずなのに、不思議と自分の肢体だけははっきりと見える。

……で、何で俺は裸なんだ。男の、それも自分の体なんて必要以上に見たくない。

「起きてってばあ!!」

妖精の音がエコーのように響く。ぐわんぐわんと反響して不快なことこの上ない。

起きて起きてと喚いているから、俺はまだ寝たままなのだろう。

ということはここは、俺の心の中みたいな所か。

「起きないとまずいんだって! ほら、さつき言ったことみたいに なっちゃんよ!」 外見が不細工ゴリラでいいの!」

(よくねえよ!?)

反論を試みるも、それが伝わっている様子はない。こっちの声は聞こえないみたいだ。

(ってことは……これがさつき妖精が言っていた力の暴走って奴か……?)

それにしてもやけに静かである。「暴走」って言うぐらいだから、もっとこう、爆発的なものを想像していたのだが。

(ったく……暴走する前に抑制してくれるんじゃないのか、妖精さんよ)

何が、守つてやるからシュークリームをよこせだ。全然守れてないじゃないか。シュークリームやらなくてよかった。やっぱりお前には賞味期限切れのプリンで十分だ。

「……やばい。やばいよやばいよ！ どうしようどうしようどうしよう」

(焦りすぎだろ)

「これってやつぱり私の失態なのかな……ああ……ホントどうしよう。……と、とりあえず結界を展開して、少しでも発動を遅らせ　ああ、でもその前に精霊界に連絡を　ってそんな暇ないし！　ああもうダメだ混乱して何がなんだか！！　誰か助けて！！　糖分欲しい！！」

妖精にとつても、今の状況は想定外のこつらしい。かなり混乱しているのが耳越しても感じる事が出来る。ってか最後のはなんだ。

『もし』

(……ん?)

何か今

『もし、聞こえますか。』

やはりどこからか、妖精以外の誰かの声が聞こえる。聴覚からの間接的なものではなくて、脳に直接響くような。

『もし』

声は巨大スピーカーから流れ出ているように大音量で聞こえている、しかし、不快さを全く感じさせない音の振動である。加えて、身体全体を優しく包み込むかのような柔らかない声。

(……誰だ?)

『ああ、よかった。返事をなさらないので、聞こえていないものかと』

声の聞こえ方からすると、目の前にはいないのかも知れない。名指しで校内放送を受けているような感じだ。

声の主は女性のようである。丁寧な敬語に、控えめな話し方。ホテルの受付嬢がこんな感じだった。

うむ、好印象。

『私はそこに居る妖精の上司にあたる者でございます』

(…………… ああ、そうかい)

『……………信じてもらえるのですか?』

俺は今、富士山が噴火したと言われても瞬間的に信じられる自信があるぜ。妖精とか今の状況とかを見せ付けられたら、誰だってそうなるだろチクシヨウ!

(疑ったって仕方ないだろ。あんたの存在よりも、この今の状況のほうが疑わしいね)

少しの空白の後、

『ふふ、面白い方。私という曖昧な存在よりも、絶対的な現実の方を否定なさるなんて。やはり貴方は聡明です。あの子が調べたことも、間違いではありませんでした』

あの子? と思ったが、あの妖精のことだろうと勝手に結論をつける。事前に調べたなんてことを言っていた気がする。

しかしこの人(?)は俺のことを買い被りすぎだろう。聡明とか何とか。確かに中学高校と成績は悪くはなかったが、それとこれとは話が別だと思う。この上司さんは何を基準に って、上司?

(あのー、さっき俺の所に来た妖精が上司のことをアホ呼ばわりしてたが、あれはあんたのことか?)

九割は聞き流した話だが、残りの一割にそんなキーワードが残っていた。

もし上司本人なら、是非ともあいつに制裁を加えてもらいたいものである。

『いえ、おそらくその方と私は別人でしょう。私が自らを上司と名乗ったのは、すべての妖精の上司に当たるという理由からです』

すべての妖精の上司に当たる……………ということとはつまり

『皆は私を、妖精の女神と呼んで慕ってくれます』

(おーいおいおいおい、とうとうカミサマまで出てきちまったよ……)

妖精が来て、魔法の話が出てきたと思っただけなら次は神ときた。どんだけファンタジーなんだ。これ以上俺の脳内CPUに負担をかけるのはやめてくれ。

『驚かれるのも無理はないと思いますが、今はそんなことをしている暇はありません。今から言うことをよく聞いてください』

何もない空間から発せられる声が、柔らかいものから真剣みを帯びた声色に変わった。

『先程あの子から説明を受けたと思いますが、今、貴方は大変危険な状況にあります。本来ならばそれを防ぐために各部の妖精たちが出回っているのですが、貴方の場合、こちらのトラブルで発見時期が遅れ、さらに予定時刻を完全に見誤ってしまいました。それに関しては誠に申し訳』

(いやいやいや、俺に謝っても仕方ないだろ。俺は今何が起きているのかも良く分かっていないんだし)

『い、いえ、そういうわけには』
(あー、もういいって。今はそんなことをしている暇はないんだろ？ どうしてもしたいってんなら、謝罪はまた今度受けるから、な？)

子供をあやすような言い方で会話を遮る俺。女神に対してなんとなく偉そうな態度だろう。女神が機嫌を損ねられて、調子に乗つるとまほーで殺しますよーなんておっしゃったらどうしよう。

女神は一瞬言葉に詰まったような気配を見せた後、

『 そうですね、貴方の 言う通り です 』

どこか、固さが抜けたような声色でそう言った。

だが、どこか変である。

『 では手短かに 話 たいと 思 』

さあこれから説明だというときに、突然女神の声が聞こえにくくなってきた。ところどころに雑音が入り、まるで電波の届いていない携帯電話みたいに途切れている。

「ザザザ。」

『貴方　これが　ひど　痛を感じ　』

（お、おいちょっと待ってくれ、よく聞こえない）

『申し訳　ですが　もう時　　力不足で　　』

話せば話すほど言葉がブツブツ切れていく。これなら安っぽイトランシーバーの方がまだましだ。

『もうだめ　では　ご冥福を　お祈り　』

（……………へ？　あ、おい！　ちょっと！　女神さん！？）

プツン、と糸を切ったような音を最後に、とうとう女神の声は聞こえなくなった。

またしても静寂。妖精の声は先ほどからトンと聞こえなくなっている。

（　　今女神さん、最後に冥福をって言わなかったか……………？）

どういう意味だ。物騒な言葉を残していかないで欲しい。お前はもう助からないからせめて死後の世界だけでも　とでも言いたいのか。

ここで、そういえば、と疑問が湧く。この「暴走」というのは過去にどれだけの人が経験したことがあるのだろうか。

あの妖精は誰しも人生に一度は体験するものなのだと聞いた。それが世界の国境を越えたすべての人間に当てはまるのなら、全部で六十六億以上の人が体験するのである。それならば、一人や二人ゴリラ状態になっていたとしてもおかしくないようだが。

（……………ま、こんなことを考えてもしかたないな）

今はそのときじゃない。元の常態に戻ったら、あの妖精に根掘り葉掘り聞かなければ。

（しかし、何も起こらないな……………）

暗闇に落ちてきてどのくらい経ったのか分からないが、短い時間

ではない。

(このまま何も起こらないで百年くらい過ぎたりして) はははは、と乾いた笑いが出るのを、ぺちんと頬を叩いて止める。なんとかして、今の状況を打破する方法を考えないと。

気合を入れ、ぐつと拳を握る。

そこでふと、何か違和感を覚え、今頬を叩いた右手を見る。

右手が、

なかった。

(……………あ?)

右手がない、いや、正確には、薄い。限りなく透明。向こうの暗黒が透けて見える。

左手を見る。

左手も、ない。

(う、うわああああああああ!!!!) 驚愕、困惑、恐怖。様々な感情を込め、あらん限りの声で叫んだ。ビニール袋のようになった両手で頭を抱えると、五指の感触がある。

俺の手は消えたわけではない。そう思うと、いくらか平常心を取り戻すことが出来た。

(な、なんだってんだ……俺の手が……!!)

慌てて自分の体の他の部位を見る。胸も腹も足も、異常はなかった。

消えているのは、両肘から上だけ。

(消えかけてるのは腕だけか。よかつ

)

どくん。

(なんだ……?)

第三話 眠った男は時に女神の声を聞く。(後書き)

感想を残していつてくれると嬉しいデス。

第四話 金髪の妖精は時に任務を遂行する。(前書き)

評価感想待ってマス。

第四話 金髪の妖精は時に任務を遂行する。

「 かはっ、げほ……こほっ」

水を一気に吸い込んだような感覚に陥り、身体を丸めながらむせ返った。

ひとしきり咳をした後、落ち着いて息を吸い込むと、先程の暗闇の中とは全く違う爽快感。透き通るような新鮮な空気がおいしい。

(……戻って、来たのか?)

ぺたぺたと自分の顔を触ってみる。異常なし。

目を開けて周りを見渡しても、気絶する前と何ら変わりはない。

いつものベッドに、踏みなれたフローリング。

きちんと服も着ているし、さっきの異常な動悸もない。

変わらない景色。

両手も 元通りだ。

(よ、よかったぁー……)

ため息とともに、こんなことを思うのも仕方がない。

短い時間の内に色々なことが起き過ぎた。しかも、それらがすべて非現実的なことだからなおさらである。

それにしても、

「さっきのは、何だ、アレか? 夢の中での出来事だったのか?

夢オチとか……そういう手塚先生激怒の展開だったのか?」

頭をよぎった疑問をつい口に出してしまっても、すぐに、それはな
いと思ひ直す。

あの痛みは、尋常ではなかった。

これまでの生涯で感じたことのない痛みだった。

紛れもない 現実である。

……。

……。

「ま、考えても仕方ないか！」

もう過ぎたことだ。こういうときは深く考えすぎないほうがいい。考えるより、誰かに聞いた方が得策だろう。

ああそうだ、妖精に聞けば早い

「つてあれ、妖精は？」

そうだ、あいつがいない。

あいつに聞こうと思っていたことが山ほどあったのに。

こんな目にあわせたんだ。少し遊んでやらなければ。

フフフ。

「おい、妖精ー？」

にやける口元を抑えながら、少しだけ大きな声で呼んでみる。

俺の部屋はそう広くない。このくらいで事足りるはずである。

「あー、起きちゃったんだあ」

甲高く少々幼さの抜けていない声が、部屋の奥のほうから聞こえてくる。さつきと全く変わらない甘ったるい声である。

しかし、俺がせっかく無傷で生還したというのに、どこか落胆したような、間の抜けた声である。さつきので「暴走」とやらが食い止まったかどうかはわからんが、一時は落ち着かせたのだからもう少し喜んでもらってもいいのだが。

向こうからコツコツと妖精がゆっくり歩いてくる音がする。足音がするということは、今は妖精の姿をやめて人間の形をしているのだろう。

(……ん？ 何でだ？ もう人間の格好はしなくていいはずなのに)

少し気になったが、今はそんなことより、如何にしてあの緑羽虫に制裁を加えるかである。あれほど痛い目にあっただ。妖精には同じ体験をしてもらわなければ。

(まず初めにー、妖精の姿にしてー、腹にデコピンしてー、指で口と鼻をつまんでー、綿棒でわきをくすぐってー)

ぐふふ、と思わず変な声が出てしまう。断じて変態ではない。

「は？ 人間じゃなくなる前にとってどういうこと…… おおおおお おおおおおお！？」

今度も縦に一線。俺の頭に日本刀を振り下ろそうとしたのを、立ち上がりながらすれすれで横にかわす。

(うわお、ベッドが真つ二つ)

轟音とともに、俺がいた場所のベッドが崩れ落ちた。

見た目とは違いすぎる筋力に、あれは魔法でも使っているのだからと勝手に自答する。

アレが俺の成れの果てにならないことを祈るばかりである。

「落ち着け、とりあえず落ち着けっ！！」

両手を前に出し、待ったの姿勢をとる。その誠意が少しでも伝わったのか、妖精は日本刀を構えたまま話し始めた。

「日本刀に見えるこの剣は、女神様がじきじきに創ってくださいました特別なもののな」

「聞いちやいねえし！！」

「これには女神様のご加護が宿っていて、これなら 覚醒後のゴリラの皮膚でも貫ける」

「いや俺ゴリラじゃねえし！？」

「……もう理性は残ってないんでしょ……？ かわいそうに……」

「俺は生まれてこの方理性を失ったことなんてないけど！？」

「大丈夫、安心して……ゴリラになる前に、私が責任を持って、楽に殺してあげる」

「人の話を聞けと言っているだろうがああああああああああ！！」

もはや妖精に、俺の声は届いていないようである。

「やあああああああああああああ！！」

「うおお！！」

掛け声とともに、横に薙ぐ一線。後ろに飛んで避ける。

「やあ！ やあっ！！ たあ！！」

横、縦、斜めと日本刀が縦横無尽に駆け回る。

一薙ぎするたびに、二つに結わえられた金色の髪の毛が振り乱される。

(くそっ……こいつ何か違いしてないか!?)

剣が振るわれるたびに転がりながら思った。

おそらく、おそらくだが　こいつは俺がさっきの「暴走」を止められなかったと思い込んでいる。女神サンでさえ冥福を祈ってたくらいだから、「暴走」してしまったら死ぬことは避けられないとでも考えているのかもしれない。

こいつの今の行動から察してみても、過去に「暴走」から生還できた奴はいないのだろう　実際に俺は生きているというのに。

筋骨きとしては、不幸にも「暴走」してしまった人間は、危険すぎるために付き添いの妖精が女神サンの日本刀で始末する　と、こんな感じか。

道理で話を聞いたことがないはずだ。

抑制をしたら記憶を消され、「暴走」したら殺されるのだから。

「もう！　避けないで！　よ!!！」

ブンブン刀を振りまわりながら、妖精は無茶な要求をしてくる。

「おとなしく、死んで！　早く、しないと！　貴方が、不細工ゴリラに!!！」

「だ、か、ら！　お前は、何か、勘違いを　」

ギリギリのところまで剣筋をかわしながら妖精の間違いを正そうとした、そのとき。

足に何かが当たり、バランスを崩してしまう。

「うおっ……!!！」

ぐらりと体が傾き、自然と視線が足元にいく。

そのスキが、いけなかった。

きゅぴーんと妖精の瞳がひかり、

「もらったあああああああああ!!!!！」

突きの構えで、俺の胸に向けて刀を差し込む

!!!

(ち……これまでか　)

目を瞑り覚悟を決め、

ガギンツ!!!!!!!!!!

「へ？」

間抜けな声を出したのは二人同時だった。

今俺の身体には、刀が突き刺さり、血が溢れている　はずなのに。

何故、金属同士がぶつかったような音がしたのだろう。

というか、なんで痛くねえんだ。

「……え？ いや、……あれ？」

妖精の困惑している様子が伝わってくる。

恐る恐る目を開けると、

刀が胸の前で静止していた。

「……どーなってんだ、これ」

左胸の、五ミリほど前。何か透明の硬い膜のようなものが、刀から俺の身体を覆っていた。ぐぐ、と妖精が更に力を込めるも、ピクリともしない。

「……え？　なんで？　なんで刺さらないの？」

突き刺す構えを解き、切っ先を見つめながらそう問う。

「……俺が知るか」

ぼそりと呟く俺に、

「う、うわっ！！　ゴリラがしゃべった！！」

「さっきから話しかけてただろうが！！　ていうか誰がゴリラだ！！」

妖精はまるで、俺がたった今初めて話しかけたみたいなりアクションをとる。

人の話を聞かない虫だとは思っていたが、まさか本当に聞こえて

らい出してくださいよおおおおおおおおお！！」

「そこかよ！！ 話を元に戻せ！！」

なかなか切実な願いだろうけど。

「帰宅時間は六時希望だよー！！ 十一時は無いよー！！ 私は女の子だよー！？ 暗くなる前に帰らせるのが普通だろー！！」

「わ、わかったから！ わかったから落ち着け！」

「これが落ち着いていられるかーっ！！ あなたのせいでねえ！

あなたのせいで私がクビになるかもしれないんだよー！？ どうしてくれるの！！ 私の老後安心生活計画をどうしてくれるのとおおおおおおお！！」

ぴくり、と俺の耳が動く。

今のは、聞き捨てならない。

「なんだって？」

「だからー、あなたのせいで私がクビになるかも」

「あ、な、た、の、せ、い、で？」

力のこもった反復に、妖精はたじろぐ。

「そ、そうだよ！ 何か知らないけど、あなたの変な体質のせいで発動予測が狂ったに違いないん」

「ほうほうほう。ほーうほうほう？ 俺の所為？ あーそうか俺の所為か！！」

沸いてきた苛立ちに、思わず声が大きくなる。

「な、なによう」

「俺が変な体質だから？ ああ、それは謝るしかないな。生まれつきのもは仕様がな。だが、予想が狂ったのが俺の所為？ そんなわけねーだろうが！！！！」

「……だって」

「だってじゃねえよ！！ いいか？ この件に関して、俺は全くもって悪くない！！ あったりまえだ！！ 女神サンのお墨付きだしな！！ 大体なんだ、聞くとところによるとそっちの不幸際でこうなったらしいじゃないか！！ それが何で俺の所為になるんだ！！」

「……でも」

「でもじゃありません!!」

「ふえ……でも、でも………あなたのせいってことにしないと、……じゃないと、私、わたしい……」

さっきの威勢はどこへやら。くしゃつと顔を崩し、瞳を潤す妖精。これはもう完全に泣き出す体勢である。

(あああ………もう泣かないでくれ。涙は嫌いなんだよ………)

思わず叱る勢いが弱まり、次につむぐ言葉を躊躇ってしまう。

「ああもつめんどくせえ!! 誰か、誰かなんとかしてくれ!! 助けてくれえええええええええええええええ!!!!」

無性に、誰かに助けをもらいたくなつた。この状況を打破できる誰かに

『はいはい、助けに来ましたよーってね』

突然、どこからか軽快な声が聞こえた。

第四話 金髪の妖精は時に任務を遂行する。(後書き)

次で最終話です。

気軽に一言残していただくさいなー。

最終話 二人は時にでこぼこコンビを結成する。**(前書き)**

評価感想、お待ちしております。

最後なんで、よかったらあとがきも見てください。

最終話 二人は時にでこぼこコンビを結成する。

(……今度は誰だ?)

半ば呆れたようにそう思うと同時に、俺のいる部屋の壁に、でかでかとしたスクリーンが現れた。一メートル四方くらいの大きさである。

ぶん、と光のふちが現れ、中央には女の姿が浮かび上がった。黒い髪の毛を上の方で一つに結わえている。

「ふえ……? あ、……マクロフィルさん!」

妖精が画面に向かって話しかけている。知り合いのようだ。

肩から上だけしか映っていないので良く分からないが、この女は作業用つなぎのような緑色の服を着ていた。とても綺麗な顔立ちをしている。

『おー、元気に仕事してたー?』

「あ、いえ……それが」

『うんうん、聞いている聞いている。なんか大変なことになってるらしいじゃないかー。こっちでも大騒ぎだ』

「はい……ごめんなさい、私のせいで……」

『あつはつはー、謝んなくてもいいって。悪いのはあのクソ管理室だけさ。あいつらがきちんと監視してないからこんなことになったんだからな』

「……はい、ありがとうございます……くすん」

『あー? もしかして、泣いてんのかなー?』

「な、泣いてなんかいませんよっ! ちょっと目から水が出てきただけで……!!」

『それを泣いてるっていうんだけど』

見た目とは裏腹に、なかなか男前な話し方をする。

妖精との話がひと段落すると、その女はこっちのほうを向いて話し始めた。

『えーと、そこの君か？ 例の問題児君ってのは』

「そう呼ばれていたのは高校のときで、今は全く優等生であるけども、まあ話の流れ的には俺だろうな」

この部屋には、妖精以外俺しかない。

『あつはつはー、君は面白い奴だな』

「えらく男前な貴女には負けます」

『おいおい、こんな美人に向かって男前はないだろ男前は！ あつはつはー』

失礼かと少しは思ったりもしたが、豪快に笑い飛ばされてしまった。たしなめる言い方にも全く悪意は感じられない。

『まあいいや。今回は災難だったなー、問題児君』

「優等生です」

『ま、キングコングにならなくてよかったじゃないか！ なによりなにより』

この女も人の話を聞かないタイプなのだろうか。画面越しに殴り倒したい。

『で、本題に入ろうと思うけど その前に。私はその金髪妖精の上司のマクロフィルというものだ。よろしく』

「はあ……よろしく」

簡潔な自己紹介に、気のない返事をする。

あ。さっき妖精が文句垂れてた上司ってのはこの人のことか。

『では本題だ。君、自分の体の異常に自覚はあるか？』

「……ああ。嫌というほど」

『具体的には？』

具体的にどうおかしいのか。

改めて聞かれると、いまいち良く分からない。

「……ええと……さっき、妖精の刀が刺さらなかった」

『それは知っている。さっき見てたから』

「見てた！？ 見てたのなら止めてくれよ！！」

どこで見ていたのかは知らないが、妖精の勘違いを解くことくら

いなら出来たはずだ。

『いやーあつはっは』

「笑って誤魔化すな!!」

『まあまあ落ち着いて。本筋はそこじゃあない。……そうだな……』
なにやら思案顔のマクロフィル。考える姿は必要以上に凜々しく見える。

『そこにいる妖精が持っている、日本刀っぽい剣を手にとってみてくれ』

「……………?」

相手方の意思がわからないが、とりあえず言われたとおりに、やと泣き止んだ妖精から刀を受け取る。

『はい、じゃあ折ってみて』

とんでもないことをたまった。

「……………いやいや、枝じゃないんだから。無理に決まってるだろ」
『いいからいいから。騙されたと思って』

訝しみながら、刀を曲げようと力を込めると、

ふにゃ。

高温で溶けかけたチョコレートのように折れ曲がった。

「だ、騙された!!」

『ええ!? 騙してなかっただろ!?』

つい、気が動転して思わぬことを口走った。

「なんだ、これは。さっきまでは固そうだったのに」
俺がちよっと力を入れただけで、簡単に曲がってしまった。

『違う違う。剣が柔らかくなっただんじゃなくて、君が折れ曲げただ。種も仕掛けもない、単純な力で』

「そんなはずは」

『ない、と言い切れるか?』

「……………」

マクロフィルの真剣な表情に閉口する。

俺は、妖精が「暴走」の説明をしていたときの言葉を思い出した。
“皮膚はダイヤ以上の強度を持ち、コップは掴んだ瞬間に粉碎する”

『まあ、そういうことだ。今、君の体内では、「暴走」を引き止めたことによつて、力が行き場を失っている。覚醒によつて爆発的に増大した力は、本来なら身体の外にすべて出てしまうのだが』

「俺が何故か押さえ込んでしまった、と」

『そう。「暴走」の抑制に失敗した例は過去にいくつかあったが、このような例は初めてだ。君のように、人間の原形をとどめたまま「暴走」を押さえ込み、まして意識もはっきりしているなんて例はな』

（逆を言えば、普通は「暴走」すると人間の原形をとどめていないということか……）

恐ろしい話だ。俺がそうなっていたかと思うとぞつとしない。

『で、だ。こちらが最終的に言いたい事は……』

「そんな類を見ない危険な存在を野放しにはできない　とか、そういうことだろ」

話を遮り、マクロフィルに代わつて続ける。

一瞬目を丸くした彼女だが、すぐさま豪快に笑い出した。

『あつはつはー、その通り、その通りだ。飲み込み早いなー、君』
そんなこと言われても、まったく嬉しくない。

「それでこの妖精に俺を始末させようとしたわけか」

『いやいや、それは違うぜ優等生君。それは任務に失敗した妖精として当たり前で、決して君だからというわけではない。というか、そんな大事な任務をその子に任せられないし』

「おい妖精。お前この人に無能つて言われてるぞ」

話を逸らし、くると顔を妖精のほうに向けて報告。

妖精がまた泣きそうになつていたので、満足して話に戻る。

「それで、どうする気だ？　今からでもそつちからやってきて俺を

殺す気か？ そっちがそういうつもりなら」

『まあ待て、早まるな。上の決定としてはそうなっちゃいるが……』
マクロフィルがちらりと妖精を見る。目を合わされた妖精は不思議顔だ。

『……私はそれに賛成したわけではないからな』

「いいのか？ そんなことを勝手に決めて。俺ならおそらく大丈夫だ。今なら　どんな奴でも返り討ちにできる気がする」

自分の掌を見る。触れると、心なしか熱を持っていた。

『………そこなんだよな！。私が上の命令に従おうとしないのは、第一に私の性格なのだが、第二に　君を倒せそうにないという事情がある。なにせあの女神様の加護を跳ね返したんだぞ？　ここにはそれ以上の力を持つやつなんていないから、女神様本人でもない限り君を倒せないだろうな』

なんだが大変なことになっている。俺は女神様に匹敵する力を持つてしまったらしい。

『もし最終的にそうなったとしても、女神様はあの性格だから、むしろ君に謝って終わらせてしまうだろう』

（あー………確かにあの人はそんな感じの性格かもな………）

声が聞こえたときの場面を思い出し、そう思う。あの控えめの物腰と丁寧な話し方は、女神サンの性格をそのまま表しているような気がした。

『そこで私は、ある結論を出した！』

マクロフィルは話の脈絡などお構いなしに、画面に向けて人差し指を突き出し、高らかに宣言した。

『これからは君を監視することにする！』

「は、はあ………」

危険対象には監視をつける。ばばーんと書き文字が背景に出てきそうなくらい堂々と宣言した割には、ある程度想像できた結論だったので拍子抜けした。

『どうした気のない返事をして！　君はこれから日常生活を見られ

続けるのだぞ!? もつと驚け!!」

「いや、驚けと言われても……。結構予想できた結果だし、それに日常生活を見られたところで、こちらになんら支障はない」

『ずっとだぞ!? 二十四時間ずっと!!』

「…………? まあ別にいいけど」

『なんと! 君は気にならないのか!? その…………なんだ、…………あの時とかっ! 見られたら嫌だろ!』

ほんの少し頬を淡いピンクに染めながら、マクロファイルは「あの時」やら「その時」とあいまいな言葉を繰り返す。

「なんのことだ?」

『…………っ! もういい!!』

ついにはパイとそっぽを向かれてしまった。

俺、なにか怒らすようなことしたか?

『とにかく! さっき言ったように、君には監視をつけるから!』

いいね!』

「あ、ああ…………」

何か勢いで決定した感が否めないが、こちらからは何も言えないので仕方ない。

(…………ん? ちょっと待てよ?)

今、マクロファイルは何て言った?

監視するではなく 監視を「つける」?

それはもしや

『それでは通信を切るが…………』

マクロファイルはなんでもないことのように、続けて言った。

『監視役として同居するとはいえ、男女の間違いは犯さないようにな、二人とも』

ブツン

モニタとともに、俺の脳も停止したかと思った。

「「なんだとおおおおおおおおおおおおおおお！？」」「
二つの叫び声がこだました。

「ど、どうということだ妖精い！！んなこと聞いてねえぞ！？」

「わ、私だつて知らないよ！！ど、どどどど同棲なんて！！」
妖精が顔を赤くして答える。

「同棲じゃねえよ！！同居だろ！！何勝手にやらしい響きにし
てるんだ！！」

くそ、と舌打ちしながら思う。

監視つていうのはてつきりモニタで観察するようなものかと思っ
ていたが、こういうことなのか。

二十四時間ずっと妖精と一緒にいろつてか？寝食ともにしろっ
てか？

冗談じゃない。

「おい妖精！俺をマクロフィルがいるところに連れて行け！今
すぐに！」

俺の提案に妖精は目を丸くする。そして、すぐに却下した。

「だ、ダメだよ！人間を精霊界に連れて行けるわけ　っていう
か、そもそもこつちからはゲートが開かないし！！」

妖精によると、あつちからこつちへのゲートは簡単に開くが、そ
の逆をしようとする膨大な力が要るらしい。だから戻るためには、
あつちからゲートを開いてもらうしかないそうだ。

「ちつ　じゃあ連絡だけでもいい！もう一回あのクソ上司に繋
げ！！」

「え………で、でも………」

「早く繋げ。でないとおの人にお前が愚痴つてたこと全部ばらすぞ」
「それだけは勘弁してください」

妖精が全力で頭を下げた後、なにやら呪文めいたことを小声で唱
え、先ほどマクロフィルが映っていた壁に向かって両手を掲げた。

ちりちりと音を立てながら、光の筋が壁を伝っていく。

やがて正方形を形作ると、中央に再び女の姿が浮かび上がった。

さつきとは違って横を向いているが、コーヒー片手に、新聞を広げてくつろいでいる風に見える。

「……忙しいんじゃないのか。」

「……あれ？ どうした、さつき通信を終えたばかりじゃないか」ズズ、とコーヒーを睨りながら、こちらを向いて答える。

妖精が反応する前に、俺が先に言った。

「どうしたじゃねえよ！ お前がさつき去り際に変なことを言うから」

『変なこととは何だ？ 私は男女の間違いを犯すなと言ったのだが』

「……ま、まさか君らもうすでに男女の契りを」

「そつちじゃねえよ！！同居するって話だ！ 聞いてないぞ！！」
頬を染めるマクロフィルの言葉を遮って詰め寄る。

「わ、私も納得いきません！ 監視の仕事に就くのも聞いてないし……まして、人間と一緒に住むなんて！！」

これまで話に入ってこなかった妖精だが、こればかりは許容できなかつたのだろう。俺とともにモニタに詰め寄る。

『何を言っているんだ君達。監視の仕事は担当の妖精としてあたりまえのことだし、同居するのは妖精の住む場所がないから仕方ないことだろう。それとも、勝手の分からない下界で、寂しく野宿でもしたいのか？』

う、と妖精が返答に詰まる。マクロフィルの言っていることが至極正論なので、何も言い返せないのだろう。

だが、俺は違う。

「それはコイツに対しての答えだな。俺が納得する理由を言え」

「……………」
今度はマクロフィルが黙る番だった。ばつの悪そうな表情で、頬を掻いている。

「これだけは我慢できないぞ」

この出来事で、いろんなものに耐えてきた。

妖精出現の驚愕の後は延々とくだらない愚痴を聞かされ、とんで

もない激痛に打ち勝ったかと思うと、金髪ツインテールに日本刀で襲われて。

仏の顔も三度までと言うが、俺は何十回仏の顔で華麗にスルーしてきたのだろうか。

しかしそれもここまで。

同居？ ふざけんな。

「生活費、いくらかかると思ってんだあああああああああ！
！……！」

しん、と周りが静まり返った。

俺はかまわず続けた。

「朝食昼食夕食にその他の間食！ 着替えや周りの小物類！ 衣食住の住は多めに見るとして、その他はどうしろって言うんだ！！ 貧乏学生舐めんよ！！ 仕送りだけで生きていくことがどんなに大変か！！ は？ バイトしろ？ この前クビになったんだよぼけえええええ！！ ガラス一枚くらい多めに見ろよ！！ ちょっとムカつく客殴っただけだろ！！ ちょっと頭突き食らわせたただけだろおおおおおおお！！」

『いや、それは君が悪いだろ………』

若干引き気味のマクロフィルが冷静にツツコミを入れる。

話が逸れた。

「とにかく！ ここに他人を住ませる余裕はない！！」

『思わぬ観点からの否定に驚いたが 君、それなら心配ないぞ』

「あん？」

秘策アリといった感じの表情を浮かべ、余裕を見せるマクロフィル。

『ちよつとこつちに』

こいこい、とマクロフィルが手招きをする。

俺は訝しむも、画面のほうに耳を寄せ、

『ぼそ、と俺にしか聞こえないほどの小声で、一撃必殺の一言を告げられた。』

「ほづ……」

提示された言葉に思わず唖る。

『あつはつはー、これでどうだ?』

にやけた表情を隠そうとせずに、マクロフィルは堂々と聞いた。俺は妖精のほうを向き、さわやかな笑顔で言った。

「やあやあかわいい妖精さん。これからどうぞよろしくね!」

「ちよつと待てこらあああああああああ!」

輝かしい笑顔を向けてやったというのに、いきなり妖精は乙女らしからぬ大きな声で叫んだ。

「何々なにがどうしたの!? なんであなたは急に乗り気になったの!? というかさっきの秘密話は何!? 超気になるんですけど!?!」

「ははつ。子供は気にしなくてもいいことさ」

「いやむしろあなたの凶変ぶりのほうが気になるけど!?!」

「うるせえなあ。もういいだろ、一緒に住むってことで。お前は野宿せずに監視の仕事ができるようになるし、俺はマクロフィルからごひゃ げふんげふん」

「ごひゃ!?! ごひゃって何? まさか五百万のことじゃないよね!?! 違うよね!?!」

『じゃあ私はこれで。ちゃんと定期的に連絡するんだぞー』

「何で否定しないの!? 待ってよマクロフィルさん!」
妖精の涙ながらの静止もむなしくマクロフィルは通信を終えた。
プツンと音が途絶え、光の線が一瞬で消える。

「マ、マクロフィルさん……」

ここには、四つん這いになり、空虚に腕を伸ばす妖精だけが残った。

俺は悲しみにくれる妖精の肩に優しく手を置き、

最終話 二人は時にでこぼこコンビを結成する。(後書き)

とうとう終わってしまったーっ。

若干急ぎ足感が否めないですけど、こういう軽いノリの作品なんだと思って割り切ってくださいな。

えと、どうでした？ 現時点で誰一人として感想くれないんで、なんか逆に恥ずかしくて死にそうデス。

これが噂の放置プレイですかそうですね！
だれか一言プリーズ！

この下から私事。

明日(30日)、大学近くに引っ越します。

そこで大事なことに気付く。

ネットにつなげない！！

これはもうね、ネット中毒者と化している僕にとって超の上に超が五個つくくらい超痛いことですよ。

しかも一ヶ月で。光はどんだけ工事が遅いのかと。

.....。

そういうわけで、一年位前の「楼火くん」って作品を再開しようと思ったわけですが、叶わぬ夢となってしまうました.....。

開始は(多分)五月上旬です。それまでしばしのお別れ。

それではまた会う日までーっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9201d/>

甘党妖精は時に襲い掛かる。

2010年10月9日17時22分発行